

## 共同体としてのデ・ステイル

—テオ・ファン・ドゥースブルフの制作理念を通じて

山田 歩 (一橋大学)

---

1917年から1932年にかけて、オランダのライデンで発行された『デ・ステイル』は、オランダ国内外の芸術家による論考や作品を掲載していた雑誌である。さらに、雑誌に集った芸術家を総称することで、20世紀初頭の前衛芸術運動の一つとしてデ・ステイルが誕生する。抽象画を先駆したピート・モンドリアンが参加していたことから、彼の特徴的な作品がデ・ステイルのイメージ・モデルとして定着している運動といえよう。しかし実際には、モンドリアンの他にも多様な芸術家が雑誌へ寄稿しており、固定化したイメージ・モデルでは語り得ないデ・ステイルが存在することは明らかである。また、雑誌刊行中に集団での活動がなかったばかりか、彼ら個人の交流もまたほとんど行われず、運動を保持するほどの強固な集団性が存在していなかったことは検討を要する。

本発表は、前衛芸術運動の一つとして見なされるデ・ステイルを、雑誌を通じて芸術家同士が顔を合わせることなく繋がる共同体として考察を行うものである。その際、絵画や建築の分野で活躍する傍ら、編集者として雑誌に関わり続けたテオ・ファン・ドゥースブルフに着目する。デ・ステイルを発展的に存続させようとしていた彼の戦略を制作理念を通じて検証することで、先行研究では積極的な意味が見出されてこなかった多様な人物の介入と離脱に対して、一つの視座を提示することが可能となると考えられるからである。

まず、デ・ステイルの内実を捉えるために『デ・ステイル』誌とその活動について確認する。メンバーの確定と、1923年に開催されたデ・ステイルの展覧会を分析することで、統一体ではなく、むしろ参加する芸術家が時とともに変化するあり方にこそデ・ステイルの本質があったことを示す。

次に、両極の対立と均衡、そして新たな次元への発展を求めたファン・ドゥースブルフの絵画制作の理念を検証する。不断の発展を試みていた彼の理論を踏まえると、モンドリアンとの不仲をもたらした常套句として語られる斜線の導入は、モンドリアンの静的で安定性のある作品に対して、動的な要素を提示し、新たな次元への展開を引き起こす目的を持っていたことが指摘できる。

最後に、雑誌に掲載されている言説から、ファン・ドゥースブルフのデ・ステイルへの態度を明らかにする。彼は雑誌『デ・ステイル』創刊に際して、芸術家が自由に雑誌へ芸術論を発表する中で他の作家と出会い、共通の土台を認知するという共同体への意識を発表している。多様な芸術家が関わりながらも、雑誌というただ一点のみでしか繋がりを持たないデ・ステイルのありようは、個人ではなく共同体として発展的に存続させようとした彼の理念により捉え直すことが可能となることを提示したい。